



生物学は、科学を通して自然を捉えますが、俳句は、言葉を通して自然に出会い、言葉を通して表現し、伝えます。俳人の黒田さんと、中村副館長が、身近な暮らしから自然について語りあい、話は言葉の大切さに及びます。言葉が乗せている世界は、人それぞれ。俳句の季語を集めた歳時記は、共通と多様の共存した、生きもののゲノムにも似ている……。

# 言葉を通して出会う自然と人間

**黒田杏子** 俳人、『藍生』俳句会主宰  
**中村桂子** JT生命誌研究館副館長

## 季語の記憶——イチジク 無花果を巡って

中村——これまではオサムシのように一つの生物に注目して歴史を見てきたのですが、次は生きものの関わり合い方の歴史を調べてみようと思って。見ていただいたのは、イチジクとイチジクコバチ、チョウと食草の共進化(6~11ページ参照)の関係です。

黒田——生命誌研究館は俳人にとって目の鱗が落ちる場所ですね。身の回りにある動植物も、その歴史や存在理由を知ると、自分の中の固定した季語の記憶が更新され、刺激を受けて次々とイメージが湧いてきます。

中村——新しいタイプの俳句が生まれるかしら？

黒田——さっき研究室で南の国の小さなイチジクに出会い、ショックを受けました。私の大好きな季語は、学生時代、料理上手な母が庭の若い実を採って丸のまま煮て、瓶詰めにして送ってくれた「無花果」と書くイチジクなのです。今はもうきちんとした会話が成立しなくなってしまった94歳の母に「お母さん、イチジクよ」と言えばほほえんでくれます。

いちじくを割るむらさきの母を割る 黒田杏子

去年の秋の句です。イチジクは私と母をつなぐ記憶の回路のカギ、絆なのです。実験室のイチジクは、中に花粉を運ぶハチ、寄生バチ、もっと小さな線虫が入った小箱でした。この時、イチジクというものがまったく別の存在として私の中に立ち上がってきました。人は誰でも身体に季語の記憶を内蔵しています。懐かしい風景、情景とともにね。その内容ががらりと更新される生命誌研究館は句材の宝庫ですよ。

## 俳句と科学

黒田——私、今、日本全国をくまなく歩いているので

すが、俳句を作るためというより、出かけた各地で、自然やその風土と出会えることが何よりありがたく感動するのです。サクラでも土地それぞれでまったく違う。さまざまな生命体が存在し、草木虫魚もさらに石やお地蔵のように生きていない存在をも含めて、私に生きてゆく勇気を与えてくれます。

中村——生きることは出会いですね。その時、人間だけでなく自然のすべてを対象にするところが俳句の魅力だし、生命誌もその目をもっているつもりです。

黒田——たとえば、サクラを見て一人帰ってくる時に、後ろからじっとサクラが私を見ているんじゃないかという感じが強いです。絵本で、雲や木に目があったでしょ。自然を見に行く時、必ず自然もこちらを見ている、見ていると、この頃強く感じます。

中村——科学はこちらから見て、時には相手をバラバラにしても中まで知ってやろうというやり方をしてきたのね。私が生命誌を“誌”としたのは、まさに相手の語ることを聞こうというつもりなのです。ゲノムの研究も、プロジェクトではゲノムを解析しますが、生命誌では、ゲノムが生きものの中で自分を読み解いていく様子を語ってもらおうと思っています。

黒田——私が俳句で体験、学習、発見していることと重なってきますね。俳句作者として生きる私にとって、自分を含めた森羅万象への好奇心と森羅万象からの語りかけ、その声を聴くことが支えなのです。私にとっての



① 研究員が解説する野生のイチジクは食べられないが、「世の中の曼陀羅が詰まった小箱のよう」と好奇心いっぱいの黒田さん。  
② アゲハチョウの産卵をじっくり観察する。(生命誌研究館の実験室で)

もんベルックが素敵なことでも有名な黒田さん。ドイツ ガンター社の編み上げ靴とインドの手縫いのシルクのストールを合わせて。(生命誌研究館の庭で)



句作の源動力です。

オサムシもアゲハも私も生命誌 小野 肇

## 季語を贈る

爽やかに草木虫魚ひとまた 黒田杏子

黒田——生命誌への挨拶句を作りました。「爽やか」が秋の季語で、気候と気持ちが爽やかであること。草木虫魚がそれぞれの生命を生きている、もちろん人も。

中村——すばらしい。黒田さんがいらっしゃるというのが、

出来はともかく表現したいことは同じ。何につけ五七五で表現するのは日本人の感性ですね。でも季語の効果ってすごいですね。

黒田——挨拶句を作る時、必ずその一句を差し上げる相手の方を思って、その人にもっともふさわしい季語を選ぶのです。それがセンスで、文化なのです。ギフトの包み紙をほどくと季語がある。私が中村さんに贈る「爽やかに」は私が作った言葉じゃないけど、「爽やかに」がもつイメージは皆わかる。そしてまさに中村さんそのもの。季語には著作権がない、誰でも自由に使える日本





黒田杏子さん



中村桂子副館長

のすばらしい財産です。

中村——なるほど。日本に四季があることのありがたさ、それを共有する季節があることのありがたさですね。

黒田——季語に著作権がないのはすごいことです。国民的な共有財産、大変な恵みなんですよ。寺田寅彦先生の言葉ですが、「歳時記は日本人の生活感覚のインデックス」。歳時記には、日本人の生活感覚、つまり感性が見出しとしてすべて収められているわけです。

#### 言葉で表現する

中村——科学は自然を数式で表そうとしたけれど、自然は語るものだと最近さらに強く思うようになりました。歳時記がある日本こそ、その感覚を生かして歴史の中で分離してしまった自然誌と自然哲学を合体し、新しく自然を語る「知」を作れるのではないかと思います。

黒田——同感ですね。科学と文芸はけっして対立するものではないし、両方とも人間が生きていくうえで欠かせないもの。両輪が共生しないと豊かにはなれませんね。

中村——人間を人間たらしめているものは言葉でしょう。だから最近、言葉がないがしろにされているのが気になります。

黒田——そうですね。俳句を作っている人は言葉を大切にしているはずなのですが、逆に既成概念的な、常識的な言葉にも囚われやすい。しかし、本質的なところで本当の自分と出会えるのが俳句なのです。句作すなわち言葉という形で他者に自分の心を発信することですから。自分の心がよく煮詰まっていないと人にちゃんと伝えられないし、共感度も減ってくる。共感というのは他者と心を共有できてこそのこと。句作の醍醐味はそこに尽きます。

中村——言葉は伝え合う前に、自分の中で磨くことが必要なんですね。表に出てくる時は俳句と科学では違いますが、自分の心を煮詰めるところは同じ。そういう言葉を大事にしたいですね。

#### 歳時記と生命誌

中村——この頃俳句は世界一短い詩として、よその国にも人気があるでしょう。

黒田——長年HAIKUを作り作品を蓄積されたドイツ俳句会の方々が、これまでのドイツ語による作品を分類整理して「ドイツ歳時記」を作りたいと発言されたことには感動しました。日本の歳時記を単にドイツ語に翻訳しても、それは日本人の生活感覚の集積であってドイツ人の季節感覚とは違う。たとえば日本では月は秋の季語だけれど、ドイツではどうなるか。ドイツ人には煌々とした冬の三日月が月のイメージなのだとも言ってらした。

中村——日本とドイツの歳時記は違うけれども、人間と自然との関わりとして生まれ出る美しい言葉の普遍性という点では、興味をそそられますね。

黒田——多くの歳時記は日本の標準時計なのです。でも地方別の歳時記も作られていますよ。私は「俳句列島日本すみずみ吟遊」と名付けて日本中を訪ね歩いていますが、各地に素敵な人々がいます。大量生産の工業製品ではない手紡ぎ手織の布地を生み出すように、豊かに心を耕しておられる。そういう人々の暮らしと密着した地方の歳時記、地方時計も大切ですね。

中村——北海道と高知は歳時記が違う。じつは、個人個人でも違うわけね。歳時記は自然と人間との関係を語る言葉のデータベースという見方、本当に興味深い。普遍だけを求めた科学に対して、多様を普遍につないでいくことこそ自然を知ることだと考える生命誌と重なり合います。世界中の国が歳時記を作り、それを比べたら生命誌になりますね。できないかしら。(写真＝外賀嘉起)

くろだ・ももこ

1938年東京都生まれ。中学時代より句作。東京女子大学在学中俳人山口青邨の指導を受け、卒業後は広告代理店博報堂に入社、「広告」編集室長など務め定年退社。句集『木の椅子』で現代俳句女流賞・俳人協会新人賞、句集『一木一草』で俳人協会賞を受賞。日本経済新聞俳壇選者。NHKテレビ・ラジオの俳句番組にも出演。著書に、『黒田杏子歳時記』『花天月地』(ともに立風書房)『俳句と出会う』(小学館)などがある。